

【遺族】 道下 亜美 氏（平成 29 年（当時 14 歳）、父を交通事故で失う）

【要旨】

○当時の状況

父が事故に遭ったので入院の準備をして搬送先の病院に来てほしいという電話があり、私と母は病院に行きました。病院に着いた丁度その時、父が救急車から運び出されるところに鉢合わせしました。その時の父は母の呼び掛けに応える動作があったので、意識がある状態でした。しかし、搬入されてから約 6 時間後の午後 11 時半頃、父は内臓の損傷による出血性ショックで他界しました。

正直に言うと、父の死の直後は悲しみも怒りも感じませんでした。ただ父の死を感じる空間にいるのがつらくて、病院で父の死を看取っている時も「早く家に帰りたい」とずっと思っていたのを覚えています。

○心情の変化

父の死後は、本日配布されているパンフレット「交通事故で家族を亡くした子どもの支援のために」（平成 24 年 3 月発行・内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付交通安全対策担当）に書いてある「気持ちの反応」の中にある「漠然とした不安」「自分ががんばらなくてはと意気込む気持ち」「自分だけ楽しんではいけないと抑える気持ち」「社会や様々なものに対する怒り」「誰も信じられないという気持ち」が自分の場合は顕著でした。

当時の家族構成は 51 歳の父、49 歳の母、20 歳で大学生の長兄、17 歳で高校生の次兄、末に 14 歳の私がありました。母は専業主婦だったので、収入は公務員である父の給金のみでした。そのため、まず今後の家族の生活が心配になりました。私の母は元看護師だったのですが、安定した職をなかなか見付けられませんでした。家族全員が、収入を得る手段を持っていませんでした。

最初は「漠然とした不安」「自分ががんばらなくてはと意気込む気持ち」が強くなり、「これから先この家族はどうなるのだろう。私と兄で家族を支えなくては」と思っていました。

そして時間が経つにつれて、「自分だけ楽しんではいけないと抑える気持ち」「社会や様々なものに対する怒り」「誰も信じられないという気持ち」が強くなっていきました。

○父の死から抱いた社会への不信感

葬式に参列した父の上司の表情は、いかにも「悲しい顔をしておけばいい」というように見え、私はその時初めて、父の死に関連して怒りを感じました。さらに、父の職場へ遺品を引き取りに行った際、「どうぞ勝手に取って行ってください」というような言葉を投げかけられました。その時私は、父が職場に使い捨てられたと感じ、大きな絶望と諦念を抱きました。父は社会の管理に携わる公務員だったため、私は次第に「社会は人を使い捨てる」と恨み、不信感を抱くようになりました。

確かにこの考えは八つ当たりで、母は私の考えの間違いを咎めました。それでも私は考えを改めたくありませんでした。事故という偶発的であっけないものではなく、確かな因果関係で父は死んだと思いたかったからです。そうでなければ、私の父の死の価値がすごく軽くなってしまわないかと思っていました。

しかし、社会をどれほど恨んでも不信感を抱いても、私は社会に助けられ、今こうして将来の目標へ向かっています。

○周囲の対応、家族関係の変化

交通遺児育英会との出会いのきっかけは街頭募金でした。あしなが育英会の街頭募金に募金した際にいただいたリーフレットに、交通遺児育英会のことが書いてありました。それで私は交通遺児育英会のことを知り、母と相談して、交通遺児育英会に支援を申し込もうと思いました。

学校は担任と教頭にのみ父の死亡が知らされており、生徒も他のクラス・科目担当の先生もいつも通りだったので、安心して過ごすことができました。父の死の空気がないところは、私にとって重要な居場所になりました。しかし、学校で知らない人が多いために、育英会への申込みでは困ったことがありました。学校を通して申込みが必要だったのですが、学校は支援機関などについて一切認知をしていなかったと思います。というのも、私達が支援機関を調べて「育英会以外にもこんな所があるのですが、申し込んでもいいですか」と聞くまで、支援機関については全く触れなかったからです。育英会の申込書を出そうとした時も、担当が分からないと職員室や事務室をたらい回しにされ、見付かった担当の先生も離任直前で、「何で離任の直前になってこんなものを持ってくるんだ」と言われたことがありました。「私もこんなタイミングで好きで父を亡くしたわけじゃないのに」と思いながら怒られていました。

その中でも良いこともありました。それは、支援をいただくことで勉強についての心配をする必要がなくなったことでもあります。パンフレット「交通事故で家族を亡くした子どもの支援のために」の「行動の変化」の中にある「家族の関係が密接になる」というのが、私の家族では顕著だったことです。

父の死後、母は私達に家族で助け合うよう話しました。そこで、長兄が自ら進んで祖父母の助けをしたいと祖父母の介護を始めたので、それを通して祖父母と私達家族の関係もとても緊密になりました。

でもその度に、私達は父の死を犠牲にして幸せを手に入れたのではないかと思うと、大きな罪悪感が今でもぬぐえません。

そのような中で大学受験も無事合格し、今は文学部英文学科で勉強させていただいております。

○共感できる場所があることの大切さ

心塾（交通遺児育英会が運営する学生寮）に入った時は、こんな良い所があったんだと思いました。月2万円で水道もガスも使い過ぎを心配しなくていいし、朝も晩も食事がついてくるので家事をする時間もかなり省け勉強に集中できる環境でした。しかも、私と同じ境遇の人がたくさん集まっているので、その時初めて父が交通事故に遭って亡くなったことについての話をし、共感できる場所ができてすごくうれしかったです。

また、入塾後は生きている実感を持てるようになりました。地元にいた頃は父への罪悪感と「家族が安心して暮らせればそれでいい」という思いがあり、おしゃれやお出かけ、趣味には余り興味がありませんでした。しかし、家族を離れて様々な人と交流することで、自分のやりたいことが次々と湧いてきました。今は自分のやりたいことを自分のためにする感覚を楽しめるようになり、とてもうれしく思っています。

心塾の方々と話をする時にみんなが口を揃えて言うことは、「私達は支援を受けてコンプレックスも何も抱いていないから、家族が交通事故に遭ったことについて触れられても余り気にはしないのに、話した時に向こうが申し訳ないような感じになってしまうので、こちらでも申し訳ない気持ちになって話せなくなる」ということです。こうして話ができる環境があることは良いことだとみんな思っています。

また、継続的な病院の治療が必要な人への支援があったら良いと思います。父の事故後、私は体調が悪くなることもあり、今も過敏性大腸症候群の継続的な治療を受けています。帯状疱疹も患ったので、その神経痛が慢性的に後遺症で残っている状態です。その診察の度にお金がかかると、やはり親に申し訳ないという気持ちになったり不安になったりするので、継続的な治療のための支援があったら良いと思います。